

関連学会印象記

第38回日本胸部外科学会に出席して

小山 信 彌*

第38回日本胸部外科学会は、久留米大学古賀道弘教授の下に、九州は福岡において、10月3日より5日まで開催されました。私も会員の一人として10月2日の夜、通常は飛行機で行くところ、家族の強い希望により、初めて新幹線にて福岡入りしました。今回は、本学会の印象と心臓血管外科系の興味ある点について紹介いたします。

日本胸部外科学会の背景について述べますと、会員数は現在約6,400名で、心臓外科医、呼吸器外科医、消化器外科医より構成され、北海道地方会、東北地方会、関東甲信越地方会、関西地方会、九州地方会の五つのブロックよりなっております。又、そのほかに関連学会として、胸線研究会、冠動脈外科学研究会、心筋保護研究会、低体温研究会、生体弁研究会などが同時開催されました。

会場は三つの施設を利用し、A会場よりJ会場の9ヶ所において開催されました。発表演題数は837題におよび、特にポスターセッションにおいては十分な討議がおこなわれるように配慮されておりました。シンポジウムは先天性心疾患の術後長期遠隔期成績、他臓器不全を合併した弁膜症の外科、急性心筋梗塞の外科治療、腹部大動脈瘤と補助手段、呼吸器疾患の外科と問題点、予後よりみた食道癌の術式の反省、各術式よりみた大血管転位症の手術、食道癌における頸部上縦隔リンパ節郭清の8題において活発な討議がおこなわれた。又、一般演題では先天性心疾患、後天性心疾患、体外循環、心筋保護、不整脈、補助循環、診断心機能、心移植、術後管理、人工臓器、胸外一般、大血管、虚血性心疾患、食道、肺、気管、縦隔、胸壁等があり、又、最近採用された新しい

発表形式であるビデオクリニックも132題の発表があり、外科医にとって新しい手術術式の修得には非常に有用であったと感じました。そのほか招請講演には大血管転移症に対する anatomical correction で高名なフランスの Prof. Yves Lecompt, 我が国でもよく知られているカナダ、トロントの Prof. R. J. Baird, 肺癌で権威のある Prof. C. F. Mountain によりあり、各々興味有る講演でありました。

しかしながら、これら800題以上の一般演題とシンポジウム、さらに、招請講演とビデオクリニックがたった3日間でおこなわれるため、すべてに参加することは不可能でありましたが、その中から、2, 3紹介したいとおもいます。

シンポジウムの中で、急性心筋梗塞の外科治療において、発表にさきがけて3年ぶりに、日本における虚血性心疾患のアンケート調査の結果が報告されました。それによると、本邦においても、A-C バイパスは10,456例となりようやく一万例を突破し、そのうち約5%が急性心筋梗塞や、PTCA, PTCR にひきつづき行われた緊急手術で、その死亡率は約21%と高い傾向を示していましたが、今後さらに本邦において増加すると思われる PTCA に対する外科医の新たな対応を迫られてくるものと考えます。一方、心筋梗塞の合併症にたいする手術は1,244例で、そのなかで左心室瘤の手術死亡率は約10%、また、心室中隔穿孔のそれは46.7%と依然問題点を有していると思われる、今後の課題でもあります。また、重症心疾患術後に左心補助装置 (Left Ventricular Assisuto Device, LVAD) も、16例に施行され今後更にその需要はましてくるものと考えられます。

一般演題では、心筋保護のセッションにおいて、

*東邦大学第一外科

Isolating Working Heart Apparatus (IWHA)を用いての研究発表がめだち、虚血心筋の代謝面よりの研究により、よりよい保護法が確立されるものと思われます。

ビデオクリニックにおいては我々の施設より2題発表する機会が与えられました。手術手技の理

解には非常に良い発表形式であります、そのプログラミングにもう一つ工夫がほしいと感じました。

このほかに、5つの関連する研究会が開かれ、非常に過密なスケジュールでありましたが、有意義な3日間をすごすことが出来ました。

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *